CTG・2018年春闘・組織拡大
建交労道本部闘争速報
2018年2月7日／第7号
〒060-0909 札幌市東区北9条東1丁目北海道労働センター2F
TEL011-711-7377
FAX011-711-7388
e-mail／kenkoro-do@nifty.com

函館市と北斗市で「健康相談会」

５会場で相談者13人

函館支部は２月１日、２日、４日の３日間、函館市と北斗市の５会場で「健康相談会」を実施しました。４日は「アスベスト被害相談会」も同時におこないました。相談者は13人（事務所での相談ふくむ）で、相談内容は振動障害５件、じん肺４件、アスベスト２件、難聴３件、ケガ１件でした。無料検診を希望した人は６人（振動障害３件、じん肺・アスベスト４件）で、聴力検査の希望者が３人いました。難聴で相談に来た大工さんはアスベストにばく露していることは間違いがないので今後もフォローしていくことになりました。すでにじん肺の管理区分を持っている人については労災申請を予定しています。

１月の相談会と合わせると相談に来た人は24人となり、１月の相談者の中から振動障害が５人とじん肺１人の診断書が出る予定になっています。

ＪＲ北海道「安全に関する労使合同会議」

「教訓」が共有されないＪＲグループ

ＪＲ北海道の第17回「安全に関する労使合同会議」が１月25日に開かれました。今回の議題は昨年12月11日に発生した東海道新幹線の台車ヒビ割れ問題で、ＪＲ西日本が公開している資料をもとにおこなわれました。内容的には他社事案ですが、新幹線を運行するＪＲ北海道として引き続き安全対策の強化と「安全第一・安定第二」「現地での判断が最優先」とするものでした。

会議に出席した北海道鉄道本部の竹田委員長は「異臭を感じながらも新幹線の運行を継続させた問題と、１月にＪＲ東日本新潟支社で降雪により列車立ち往生が発生して乗客の皆さんを長時間にわたり缶詰めにした問題から、事故や事象による『教訓』がＪＲグループで共有されていないと感じました」と感想を述べています。高速で走行する新幹線の台車ひび割れ問題では、小倉駅で異常を感じながらも名古屋駅まで運行を続けさせたＪＲ西日本の「安全軽視」の姿勢は、石勝線特急列車脱線火災事故から学んだＪＲ北海道の「現地での判断が最優先」とする教訓が生かされていません。１時間に４本の列車が運行する快速エアポートよりも新幹線は列車間合いが短く、小倉駅で異臭を感じた時点で運休を決め「安全を最優先」に乗客を後続の列車に乗り換えてもらう判断も十分にできたはずです。また、新潟での事象は、テレビのニュースで運転士と車掌が踏切手前で立ち往生した車両の前方をスコップで除雪する様子が放映されていましたが、その地点から先に進んだことで乗客を避難移動する手段を失したといえます。ＪＲ北海道は、函館線で特急列車が降雪による立ち往生で、駅間に停車したために非常物資の運搬や避難移動が困難となって乗客に多大な迷惑をかけたことから、無理な進行はやめて駅ホームでの待避を基本としました。この教訓が生かされたなら、最初に立ち往生した地点から乗務員が除雪をおこない列車を進行することはなかったと思われます。ＪＲグループと言いながらも結局は自社の儲け最優先の考えから「運行」を第一として「安全」は二の次に置かれ、他社の教訓は共有されない現状だと言えます。公共交通として最も重要な「安全」よりも「儲け最優先」の本州ＪＲ会社の姿が露呈された大きな問題です。